

3 花 き

項 目	作 業 内 容
(1) デルフィニウムの栽培管理	(今月の作業のポイント) ○デルフィニウムの栽培管理 ○年末出荷用電照ぎくの栽培管理 ○シクラメンの仕上げ時期の管理 ○施設花き類の防寒対策 <さくらひめ> 9月中旬に定植した一番花の出荷時期は12月中旬からとなる見通しである。 ア ピンチ 11月に入ると出蕾が始まり（写真1）、頂芽の生長とともに下部の蕾の間隔が空き始める。全体がほぐれ、主枝の最下位の花と最上位の一次分枝の区別がついた段階で頂芽をピンチし、一次分枝をスプレー状に開花させる（図1）。 イ 温度管理 最低温度は10℃である。それ以下では生育が緩慢になり、採花遅れや二番花の生育遅れになるので留意する。日中は20～25℃で管理する。 ウ 電照 日長が短くなる11月上旬から電照を開始し、日長延長により生育を促す。LED球（赤色）で17:00～19:00の2時間、白熱球で17:00～21:00の4時間を目安とする。 エ かん水管理 出蕾後はかん水量を少なくし、土壌表面は乾燥気味にする。 オ 施肥管理 追肥は葉色を確認しながら行う。窒素、リン酸、カリとも成分量で4～6 kg/10 aを月に1回程度施用する。ただし、緩効



写真1 さくらひめの一番花抽台後の出蕾

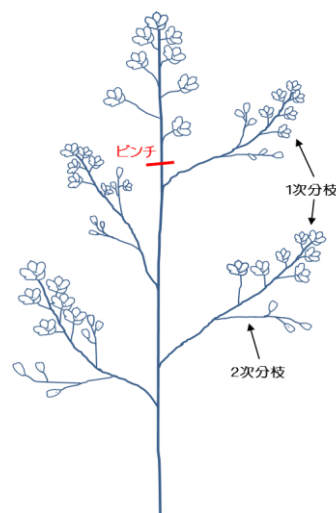


図1 さくらひめのピンチ位置

項 目	作 業 内 容					
(2) 年末出荷 用電照ぎく の栽培管理	性肥料を用いていれば追肥はしない。 ハウスを閉め込む機会が多くなると、うどんこ病の発生が多くなるので適切な防除に努める。 ＜エラータム系＞ 10 月上旬に定植した一番花の出荷時期は 12 月下旬からとなる見通しである。 ア 温度管理 温度は最低でも 13℃になるよう保温・加温する。高温による早期抽台株は、一番花を採花すると株が弱り、二番花以降の採花に影響する。そのため、摘蕾して株に養分を蓄え、他の株の収穫に合わせて株元まで切り戻す。ただし、ほとんどの株が早期抽台した場合は年内採花を諦め、最低夜温を 8～10℃に下げ生育をゆっくりにし、株の充実を図る。日中は 20～25℃で管理するが、日中 25℃以上で管理すると寒暖差によって花とびや奇形花になる場合がある。 イ かん水管理 出蕾後はかん水量を少なくし、土壌表面を乾燥気味にする。 ウ 施肥管理 追肥は葉色を確認しながら行う。窒素、リン酸、カリとも成分量で 4～6 kg/10 a を月に 1 回程度施用する。 ハウスを閉め込む機会が多くなると、うどんこ病の発生が多くなるので適切な防除に努める。					
	一般的には出荷予定の 2 か月前である 10 月中旬が、年末出荷用電照ぎくの消灯時期となる。11 月は、花芽の発達時期にあたる。 ア 温度管理 昼温は 20～25℃となるよう、保温と換気に努める。夜温は、消灯 1 週間前から消灯 3 週間後までは栽培品種の花芽分化適温（下表）か、それより 2℃程度高めに管理し、花芽分化を促す。その後の夜温は 12～15℃とし、出荷期の目標に合うよう、花蕾の発達を見ながら温度調節する。膜切れ後は再び 17～18℃まで上げて花卉の発達を促すのが望ましい。 きくは加温温度が高く、暖房経費の節減のため送風ファンを 表 主要品種の花芽分化の適温（消灯後の加温温度） <table border="1"> <tr> <th>品 種 名</th><th>花芽分化の適温度</th></tr> <tr> <td>神馬、精興の誠、精興光玉</td><td>18℃</td></tr> <tr> <td>花秀芳</td><td>15℃</td></tr> </table>	品 種 名	花芽分化の適温度	神馬、精興の誠、精興光玉	18℃	花秀芳
品 種 名	花芽分化の適温度					
神馬、精興の誠、精興光玉	18℃					
花秀芳	15℃					

項 目	作 業 内 容
(3) シクラメンの仕上げ時期の管理 (4) 施設花き類の防寒対策	設置して施設内の温度ムラ解消に努める。 イ 再電照 12月以降に出荷する作型では、上位葉の葉面積を確保し「うらごけ」を防止する。併せて、再電照で舌状花数を増やし（品質向上のため）、わい化剤処理で花首伸長の抑制を図る。処理時期等は10月の作業内容を参照する。 ウ 病虫害防除 施設内が換気不良で過湿になると病害の発生が多くなる。特に施設ぎく栽培で大きな問題となる白さび病は、施設内を十分換気し、過湿にならないようにするとともに、防除を徹底する。なお、毎年多発する施設では全面マルチ栽培が有効である。害虫ではハダニ、アブラムシ、スリップス類の防除を行う。 11月は夜温が低下してくるため、15℃以下にならないよう適切に保温・加温する。ハウスを閉めると灰色かび病の発生が多くなるため、暖房機の送風ファンや循環扇等で空気を動かす。 開花期以降の追肥 写真2 出荷期を迎えたシクラメン は、窒素：リン酸：カリ比を2：1：3程度とし、5～6日に1回窒素濃度で75～100 mg/ℓ (ppm) の液肥を、株の状態を見ながら施用する。また、蕾が上がり開花し始める頃から、固形肥料を5号鉢で2～3粒置く。 出荷予定時期の1か月前より、開花した花茎の抜取りを止める。5号鉢では20本、6号鉢以上では30本程度の花茎が揃ったら出荷する。 気温の低下に対処できるよう、施設栽培では以下の防寒対策を講じておく。 ア 古くなった被覆資材は新しいものに張り替え、ハウス内への日射透過量を多くする。施設内をできるだけ気密にするため、破損箇所は補修する。内張被覆を併せて準備し、出入口は二層～三層カーテンを設置して冷気の流入を防ぐ。



写真2 出荷期を迎えたシクラメン

項 目	作 業 内 容
	イ 暖房機の安全使用（不着火、不完全燃焼防止）や熱効率を高めるため、事前に燃焼室の掃除をする。また、サーモスタットは精度の高いものを選定し、生育に応じて調整し、生育適温以上の暖房を行わない。 ウ 暖房機からの温風誘導ダクトは、施設内の温度ムラが少なくなるよう適正に配置する。送風ファンを設置して、ハウス内の温度ムラを解消する。

（作成 農林水産研究所）